

地質サイトカード

カードNo.		C	通しNo.	65	作成日	2025/6/17
ヘリテージ名		なんぶきゅうりょうち 南部丘陵地				
	地質・地形	出雲平野・宍道湖・中海の南部地域にはこれらの平地に沿う形で丘陵が西北東～西南西方向に連続している。これらの丘陵は主として第三紀中新世に堆積した礫岩・砂岩層・泥岩層から成っている。多伎町付近では垂円礫層(大森層)が分布している。出雲市多伎町から斐川町にかけては砂岩層・泥岩層が主体であり、布志名層と呼ばれている。一部の地域ではその上位に松江層と呼ばれる砂岩層も見られる。宍道湖西部から中部の南岸にあたる松江市宍道町では布志名層よりも古い時代に堆積した凝灰質砂岩層(大森層)が丘陵を構成している。この砂岩(通称「来待石」)は石灯籠や狛犬などの石造物をつくるのに適した硬さであり、また均質であるところから古くから採石・加工されて全国に出荷されている。宍道湖東部の南岸の丘陵は泥岩層(布志名層)であり、この地域は貝類などの化石が多産するので化石の研究者には全国的に知られた場所である。松江の市街地周辺の丘陵地は布志名層よりも新しい時代に堆積した松江層の砂岩層及び玄武岩溶岩から成っている。 出雲市多伎町から斐川町にかけての丘陵の南部地域には新第三紀中新世の時代に、広大な陥没地形(出雲湾入部と呼ばれている堆積盆)があり、そこに礫岩、砂岩、泥岩、安山岩・デイサイト・流紋岩及び同質火砕岩などが堆積、ないしは噴出したものが分布している。宍道湖東部の丘陵の南部地域にも同じような湾入部に堆積した新第三紀中新世の地層や溶岩・火砕岩の地層がある。宍道湖西部～中部南岸の丘陵の南部地域には泥岩層(久利層)がある。その南部(松江市宍道町南部地域)には先述の新第三紀中新世の地層が分布している出雲湾入部と松江湾入部の中間地域であり、半島状の形で前期古第三紀の風化した花崗岩・花崗閃緑岩が分布している。				
	歴史・文化	このエリアは、特に、古代律令国家が成立する以前、弥生時代から古墳時代にかけて、有力な集団が存在しており、関連する遺跡が数多く残されている。6世紀頃の前古墳後期には、松江南部サブエリアと出雲南部サブエリアとに大型古墳がみられ、宍道湖・中海周辺地域の東西で政治勢力が対峙していた状況がうかがえる。				
	生物・生態	松江市や出雲市の南部に広がる中国山地の山すそ一帯は、いわゆる「里山」と呼ばれるエリアで、長年にわたって人が日常に生活を営み、人による自然への働きかけ、つまり人による管理が継続的に行われてきた地域である。 現在、この地域に生育する植物種の多くは、日本から朝鮮半島、中国大陸、そしてヒマラヤ南麓の地域に連続した範囲(日華区、東アジア区)に共通して生育・分布するものである。この地域は、比較的温暖で年間を通じて豊富な降水量に恵まれ、川や池などの水域を除く全域において高木の森林が形成されている。 本来の自然植生は、常緑広葉樹林(最近はこのアジアの常緑広葉樹林を照葉樹林と呼ぶことが多い)であるが、古くから人の影響を受け、もともとあった極相林が変化を続けてきて、現在はアカマツやコナラなどの二次林となっている森林がほとんどである。また、松くい虫で枯死したアカマツ林は、スダジイなどの二次林に移行しつつある。このように、長年にわたる人の関わりや気候の変動等によって、この地域一帯の里山は複雑な植生となっており、さまざまな植物が生育している。 松江市や出雲市南部で最も標高の高い箇所は、標高536.3mの鼻高山であるため、潜在的に常緑広葉樹林におおわれる地域といえる。しかしながら、古くからの森林伐採や人工造林などにより、本地域の大部分はナラ類やシデ類を中心とする落葉広葉樹二次林、スギ・ヒノキ植林などが広がっている。				